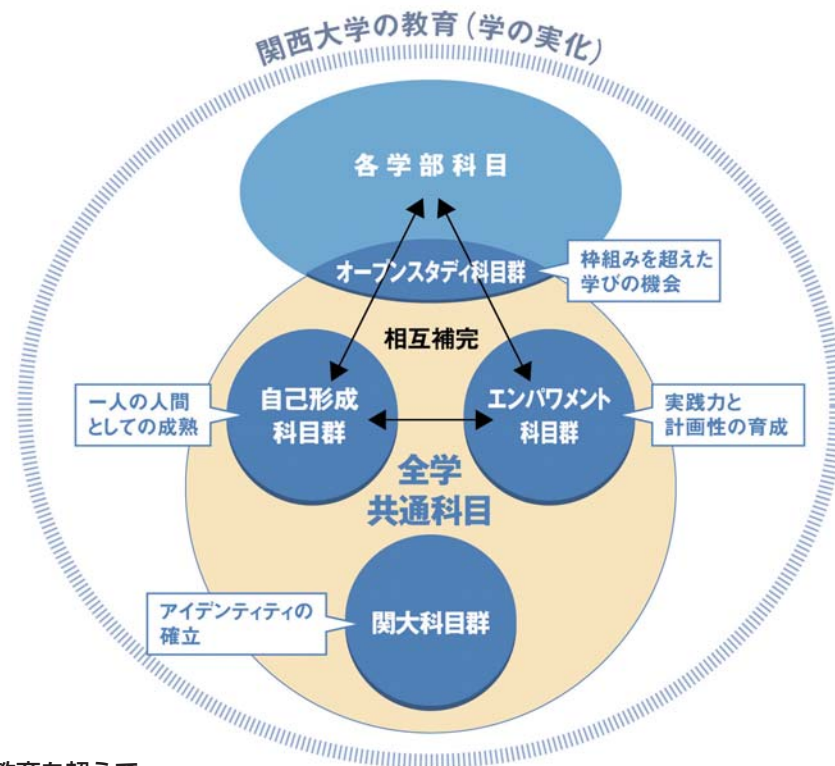


2008年度から新カリキュラム 関西大学「全学共通科目」

総合大学のメリットを最大限に活用 社会で活躍するための資質を伸ばす

関西大学は、2008年度入学生から、従来の「教養科目」「インターファカルティ教育科目」「保健体育科目」を統合して、「全学共通科目」とする新しいカリキュラムをスタートさせる。学部の枠を超えて、社会で活躍するために必要な広い視野と能力を、そして本学の学生にふさわしい資質を引き出す新カリキュラムとは――。



■「全学共通科目」の狙い――従来の教養教育を超えて

日本の大学では長らく、1・2年次の「教養教育」を人文・社会・自然科学の分野別に縦割りにして3・4年次の「専門教育」に備えるという考え方が広くとられてきた。しかし、1991年に大学設置基準の大綱化がなされてから、多くの大学で新しい学問と社会のかたちに対応する改革の流れが見られる。

本学では2004年に教養改革に関する学長諮問が出されたのをきっかけに、約3年間にわたる全学的な議論を経て、2008年度入学生から教養教育を大幅に改編し「全学共通科目」をスタートさせることになった。

その基本理念は、教養教育が専門教育に入るための準備段階として「従属的」「階層的」にとらえられてきたことへの見直しにある。そして、関西大学の学生にふさわしい資質を学部の違いを超えて引き出すこと、そのうえで学部ごとに特化した専門教育と有機的に関連させながら総合的な知を備えた自立した個人を育てることが、全学共通科目の目的となっている。

■A群(自己形成科目群)の教育の目的と科目の性格 (マトリクス表とサブグループ)

教育の目的 科目の性格	人間性 (人格の陶冶)	社会性 (成熟した社会人)	国際性 (地域・国際社会の一員)
知の発見 (洞察力・自己決定力)	1. ところ・からだ・いのち 2. 思考・行為 3. 自己表現・他者理解 4. 人権 5. 時事問題	1. 倫理・道徳 2. 生活の中の知 3. 地域・集団・民族 4. 日本の社会 5. 時事問題	1. 国際理解 2. 自然・環境 3. 世界の中の日本 4. 平和と戦争 5. 時事問題
知の継承 (探究心・知的好奇心)	1. 知の見取り図 2. 知の探求		
知の跳躍 (創造力・総合力)	学問領域を意図的に超えた各テーマ		

○目的と性格を掛け合わせたマトリクス表の枠の中に「1. ところ・からだ・いのち」などのサブグループをつくり、そのもとに関連科目が設定されます。これによって、一つの科目の目的・性格・内容などがよりわかりやすくなります。

■ 関大生の学ぶ力と意欲を引き出し 現代社会の要請に応える科目群

●全学共通教育推進機構長 高瀬 武典

全学共通科目の教育システムは、二つの特長を備えています。まず、従来の「教養科目」を学生の多様な知的関心に応えるかたちに生まれ変わらせたことです。学生一人ひとりの個性を伸ばし、多様な問題関心を育てる、新しいアプローチからの科目群です。具体的なイメージがあるから、学ぶ意欲がアップします。

もう一つの特長は、総合大学としての関西大学の専門教育とのコラボレーションを最大限に生かすことに配慮していることです。10学部を擁する本学の誇る「知の多様性」をいっそう活用し、学部の枠を超えてさまざまな学生が共に学ぶことで、知性を活発に交流させることを期待しています。

■ 四つの科目群の内容

――長期的なキャリアデザインを支援

A群 自己形成科目群

高校生から社会人への成長を促す科目群。①知の発見、②知の継承、③知の跳躍という三つの科目区分を設置。各科目ごとに「人間性」「社会性」「国際性」のいずれかに教育の目的を設定している。

B群 エンパワメント科目群

なりたい自分に向けて、能力を磨き実践する科目群。「スタディスキル科目」「健康・スポーツ・人間支援科目」「キャリア教育科目」の三つのカテゴリーを用意している。

C群 オープンスタディ科目群

学部や大学の枠を超えて、幅広い学びの機会を提供する科目群。「大学コンソーシアム大阪プログラム」「生涯スポーツ・身体運動文化コース」などがこれにあたる。

K群 関大科目群

関西大学の学生としてのアイデンティティを形成する科目群。「知の群像：日本の近現代史と関西大学」「吹田市と関西大学」「高槻市と関西大学」「関西文化圏と関西大学」が開講される。

「笑い測定機」を開発

笑いを数値化し、アッハ単位で表示

ソシオン研究プロジェクトユニットの木村洋二・社会学部教授らの研究チームが開発した「笑い測定機」のデモンストラレーションが、2月20日に行われた。笑いは免疫力を高め、健康増進に役立つと言われているが、「おかしみ」の笑いを定量化するこの装置は、笑いと健康の関連を科学的に検証する革新的ツールとなる可能性を秘めている。

5歳の女儿と30代の男女3人の被験者を笑わせて、数値を測る実験を実施。「笑い測定機」は見事に笑いをとらえ、その度合いを数値化し、アッハ(aH)という単位で表すことに成功した。

被験者の横隔膜の周辺の皮膚にセンサーを張り付け、筋肉に発生する微弱な信号(筋電位)を1秒間に3000回の頻度で測定。木村教授のジョークや、吉本興業の若手の漫才コンビ「りあるキッズ」のお笑いによって引き起こされた笑いに反応して、パソコン画面に「笑い波」が現れ、その波形の違いが分析され、度合いが数値で表示された。

大爆笑は1秒あたり5アッハほどで、4秒続くと20アッハになる。この日の最高値は女儿的42アッハ。4.2秒の笑いで、1秒あたり10アッハだった。大人のくすくす笑いは15秒で3アッハ。1秒0.2アッハにあたる。

関西大学では、笑いを21世紀人間科学のフロンティアとしてとらえ、学際的に「笑いの総合科学」を追究している。「笑い測定機」についても、携帯電話ほどのサイズに小型化することを目指し、開発を進めていく。

